

2024年度

公益財団法人 旭酒造記念財団

水や水環境の保全活動等助成事業

「霞ヶ浦の水辺環境の保全・再生、及び環境学習」

特定非営利活動法人 水辺基盤協会

理事長 吉田 幸二

1. はじめに（水辺基盤協会の概要）

NPO法人水辺基盤協会は、「後生に残そうゴミのない美しい霞ヶ浦！」を目標に、魚釣りや清掃活動を通じて、ゴミのない美しい水辺や健康な水域を、次代を担う子供たちに残すための活動を30年に渡り行っています。それは、湖岸域のゴミを回収除去することで、健康的な生き物が増え、海に流れ出るゴミを未然に防ぎ、それが地球を守ることへとつながると信じているからです。

また、様々な要因による水生生物等の減少に対して、その保全と再生のための活動にも取り組んでいます。併せて、人と湖との関わりや関心が低くなっている時代、魚釣り体験を通して親子で水辺にふれあい、水辺の生き物や環境について学び、自然を大切にする気持ちを育むことを願って、環境学習を行っています。

協会の会員数は現在300名程で、たくさんの釣り人の有志も集まり、活動を支えて頂いています。

2. 霞ヶ浦における水辺環境の現状や課題等

日本第2位の面積を有する霞ヶ浦は、元々汽水湖でしたが、塩害防止や水資源の安定確保を行うために、1975年から最下流に位置する常陸川水門で水位調節が開始され、淡水湖へ変化してきました。また、1960年代からの流域人口の急激な増加に伴う水質悪化や湖岸堤の整備なども相まって湖内の水環境は大きく様変わりしました。近年の水質は、COD値は7前後で推移し、環境基準値を超えてはいますが、改善されてきました。

霞ヶ浦の水辺における主な課題として、1点目は不法投棄されたゴミです。以前よりは大夫減少していますが、まだまだ大量にあります。ゴミの中には大型家電製品、農薬や塗料の容器、注射器や薬品などの危険物の他、プラスチック系ゴミも多くあり、これらは海に流れることなく湖底に堆積した状態です。飲料水として利用している霞ヶ浦にはあって欲しくないゴミです。

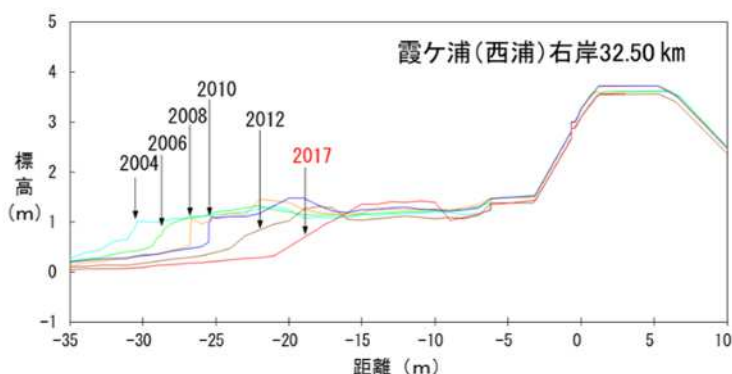


（写真）湖岸の漂着ゴミ

2点目は湖岸植生帯の減少です。一部で養浜などの保全対策事業も行われていますが、自然湖岸では、安定した水位と波浪等により、残念ながら止まることなく確実に減り続けています。水生生物の生育・繁殖場として必要な水際のエコトーンの減少は、非常に深刻な状況にあると思われます。

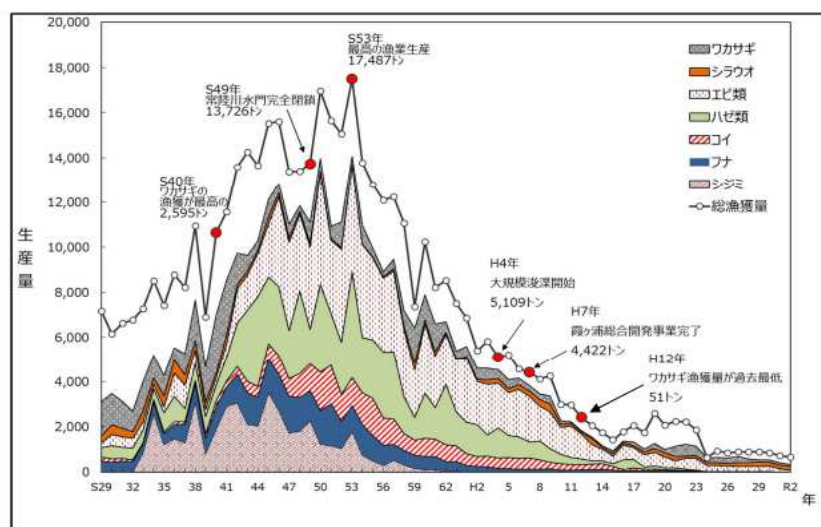


(写真) 湖岸植生帯の減少状況 (西浦右岸36km付近)



(図) 湖岸水際部(植生基盤)の浸食状況 (西浦右岸32.5km)

3点目は霞ヶ浦の名産でもある代表魚種、ワカサギの減少です。地球温暖化に伴う水温上昇により、ワカサギが適応できない水温となってきた事が主な要因と推定され、漁業へも大きな影響を与えています。



(図) 霞ヶ浦(北浦)における魚種別生産量 (出典:霞ヶ浦の水産 令和4年10月 茨城県)

こうした状況を少しでも改善し、霞ヶ浦の豊かな水環境を目指して、私たちは活動しています。

3. 水辺を見てきた釣り人の思いから始まった湖岸清掃活動

(1) 「53PickUp！」

私たちの基幹となる活動として、「53PickUp！（ゴミピックアップ）」があります。

このスローガンは、「53PickUp！は地球を救う」です。水の惑星と言われている地球ですが、海洋汚染が大きな問題になっています。海は地球の生命の根源ですが、淡水域のゴミを拾い、海へ流れ出るのを阻止しすることも地球を守る事に繋がると考えているからです。

そして私たちは「ゴミのない釣り場で魚釣りを楽しみたい！」「自分たちの水辺は自分たちが守る」という思いから、1995年に釣り人による釣り場のゴミ拾いイベントとしてスタートしました。しかし、当時の霞ヶ浦の水際には溢れるほどのゴミがあり、その処理の難しさが大きな課題でした。陸域のゴミは自治体、湖内のゴミは国土交通省というように、ゴミの所在により処理の行方が異なることなどから、行政に処理の協力が頂けませんでした。

それならと、参加者から参加費を徴収してゴミ処理費用に充当することにしました。最初は、清掃活動のボランティアでお金を取ることに異論を唱える人も多くいましたが、事情を説明すると、「霞ヶ浦で釣りをしたり、霞ヶ浦の水を飲んでいるからね。。」これが皆さんからの回答でした。他人任せではなく、拾ったという責任の下で自分たちがその処理まで行う。この自助自立を目指したボランティアスタイルは、日本で、いや世界でも初めての試みだと思います。

その後、私たちの活動が行政にもご理解が得られ、処理の協力を得られるようになりましたが、大人1,000円の参加費を徴収するスタイルは続けています。この強みは万が一、私たちの清掃活動がどこからも支援も協力も得られない状況に陥ったとしても清掃活動を行い自ら処分までできるということです。自助自立の精神が生きてきます。

53PickUp！は年に2回(5月と11月)開催し、2026年5月に58回目の開催となりました。

毎回300名以上の方に参加頂いていますが、現在頂いた参加費は、軽食配布、クイズ大会、抽選会、フリーマーケットなどに充て、家族で楽しめる清掃活動イベントとして運営しています。

私たちが子供たちに伝え残す活動として、水辺の清掃活動はあって然るべきだと思います。魚釣りが縄文時代から続く伝承文化であるように、釣り場の清掃活動も伝承文化だと考えています。いつの日か、拾うゴミのない釣り場にしたいと思っています。

また、この取組みは全国の釣り人にも波及し、各地で参加費を徴収する清掃活動「53PickUp！」が開催され、その数は14箇所に及び、年間で最多で20回以上が開催され、水辺のゴミ回収に努めています。

(「53PickUp！」の活動は、テレビ東京の報道特別番組「地球共生」の第6部でも紹介されました。<https://www.tv-tokyo.co.jp/kyosei/program06.html>)



(写真) 53PickUp! 清掃後の集合写真



(写真) 53PickUp! の参加者

(写真) 集められたゴミ

(2) 「防塵挺身隊」

防塵挺身隊とは、読んで字の如く、自らの身を挺して水辺に迫り来る塵芥を防ぐ事にあります。胴長を履き、釣り用のボートを使い、陸上からは攻略できない水中や湿地帯のゴミを回収します。

比較的狭いエリアを集中的に行う清掃活動です。

2003年からスタートし、年6回の開催ですが、台風後など湖岸に大量のゴミが漂着したときは、緊急的に出動します。

参加者は毎回40名程で、2026年4月までに123回開催されました。

こちらの参加費は500円ですが、処理費は行政にご協力を頂いているので、参加費は活動後の反省会での昼食代等に充てています。反省会では、国土交通省霞ヶ浦河川事務所や霞ヶ浦導水工事事務所、自治体職員との情報交換など、参加者同士のコミュニケーションの向上を図っています。



(写真) 活動の様子



(写真) 集合写真，昼食をとりながらの反省会

53PickUp！と防塵挺身隊の活動で回収するゴミの量は、毎年5～6トンにもなります。

4. 既存施設の有効活用と新たな価値の創造

(1) 浄化施設復活への道 ～『生物生息環境の保全・再生』に効果発現！

2017年から、水辺の生き物を増やすための新たな活動が始まりました。

霞ヶ浦への流入河川の一つである清明川の河口から湖岸にかけて、国土交通省霞ヶ浦河川事務所が整備した「清明川植生浄化施設」があります。



(写真) 清明川植生浄化施設全景

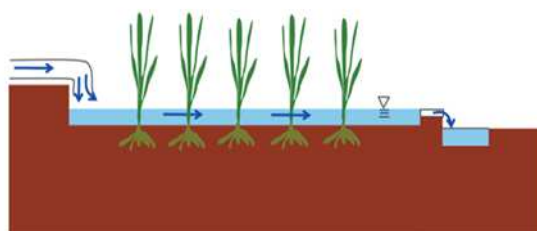
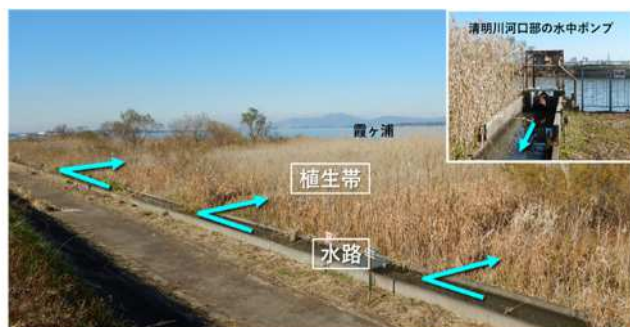


図2-1 湿地法の表面流れ方式のイメージ

(写真・図) 浄化施設の仕組み

本施設は、当時、水質が悪化していた霞ヶ浦の水質浄化事業の一環として、流入河川からの汚濁負荷量を削減することを目的に1996年に完成し、稼動しました。

施設は延長950m、幅40mの植生帯に、清明川河口付近からポンプで汲み上げた水を流し、窒素やリンの除去を行うものです。その後、2010年にポンプが老朽化で壊れ、清明川の水質も改善傾向であったことから稼動が停止され、植生帯は樹林化が進行し荒れ果てた状態になっていました。

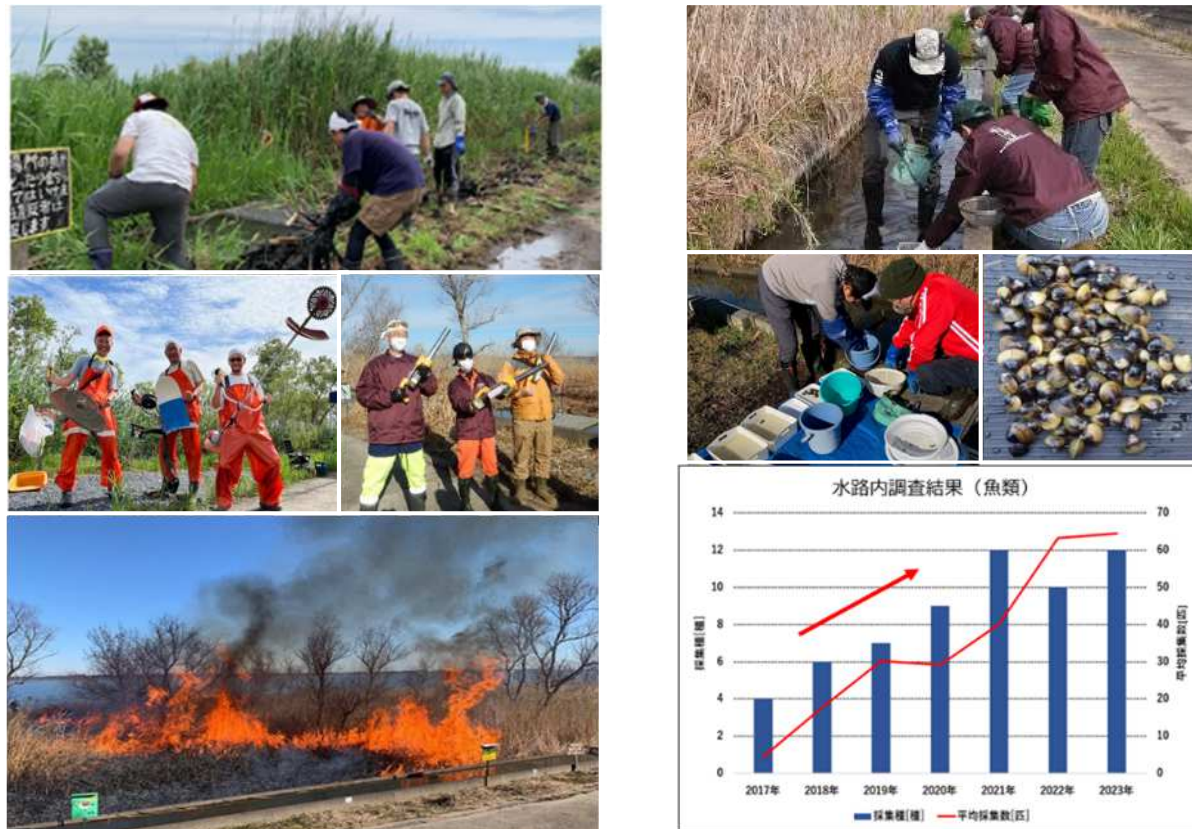
しかし、浄化施設内の水路や植生帯には、ポンプによる水の動きと併せて様々な生き物が生息・繁殖しているので、管理者である霞ヶ浦河川事務所へ施設の再稼働を熱望し、環境学習など施設の新たな活用方法を提案してきました。

そして、霞ヶ浦河川事務所のご理解・ご協力を得ることができ、連携して、施設復活に向けた活動が2017年にスタートしました。偶然にも河川事務所の別事業で使わなくなった水中ポンプがあり、ポンプ規模は元の1/10の吐出量ですが、それを流用し、施設に水を流して頂けることになりました。

草刈りや火入れ、生物・水質観察、コンクリート水路の多自然化などの活動を毎月2回以上、10名程のスタッフで続けてきた結果、現在は植生帯もきれいになり、景観も改善しました。

また、施設内のコンクリート水路には、所々に割栗石を入れて、流況に変化をつけるなど多自然化を図り、水が流れることで、魚類や二枚貝も確実に増えてきました。

そして、水路から植生帯へも水が供給され、湿地環境の回復も進んできました。魚類等を捕食する鳥類も増え、生物多様性向上の効果を感じています。植物ではハンゲショウ、ノウルシ、ミゾソバなどのタデ科の植物やマコモ、ショウブ、ヤナギトラノオ(絶滅危惧種)なども確認できました。



(写真) 維持管理作業の様子, 水路での魚類調査の様子と結果

(2) 施設の新たな活用 ～『環境学習フィールド』として有効活用！

2022年からは、この植生浄化施設内の水路や湿地で環境学習を年2回、開催しています。内容は、親子を対象にした魚釣り体験です。1家族に1人の講師が付き、魚や釣り具の扱い方など丁寧に教えます。子供たちが釣った魚は水槽に入れて観察し、併せて水質調査やプランクトン観察、湿地内の探検などを行っています。また、ライフジャケットを着用して頂き、水辺の安全確保の必須アイテムであり、自分の身は自分で守ることを教えています。

参加者のアンケート結果では、満足度は常に100%と高く、参加申込みも予約開始後にすぐに埋まるなど、子育て世代にニーズがとても高いと感じました。この体験を通して、縄文時代から続く釣り文化の伝承と、たくさんの親子が水辺にふれあう機会が増えて、霞ヶ浦の水環境にもっと関心を持って頂ければと願っています。



(写真) 環境学習の様子

(3) 施設機能の向上 『水辺の小さな自然再生』で生き物を増やす！

2023年1月には、さらに生き物を増やすため、植生施設内に魚道を設置し、湿地の掘削作業を行いました。

このアイデアは以前から考えていたのですが、日本河川・流域再生ネットワークが事務局である『水辺の「小さな自然再生」現地研修会』の開催地として選定され、研修会として行いました。

この研修会は、様々な主体が協力、学び会、仲間を増やし育てていくことが大きな目的です。



「浄化施設の水路と湖をつなぐ魚の通り道づくり」をテーマに、午前中は座学、午後は手作りの魚道づくりと湿地帯の水路作りを実践し、手づくりでできるエコアップの手法を参加者と共に学び合うことができました。

琵琶湖で活動している団体など遠方からもご参加頂き、総勢32名で「小さな自然再生」を学び、参加者各々が発見や気付きがあり、今後の活動のヒントなども得られ、人材育成にも繋がるとても充実した研修会となりました。

完成後の5月には早速、大量のフナが湖から湿地へ遡上・産卵し、効果を確認することができました。しかしそれ以上に、団体活動として大規模な自然再生事業は出来ませんが、少人数でも少しの予算と工夫次第で、何かできる事もある。ということを改めて実感できたことが良かったと思います。

<http://jp.arr.net/jp/activity/publication/files/2023/03/JRRNtraining20230114report.pdf>



(写真) 魚道構想と実際に設置した魚道



(写真) 魚道設置と湿地掘削の様子、参加者集合写真



(写真) 整備後のフナの遡上、現地で採取された2枚貝やタウナギ

関係機関のご協力のもと、廃止になりかけていた浄化施設を復活させ、水辺環境の保全・再生や地域連携、環境学習等のフィールドとして、新たな利用方法を創出する事ができたことが、何より大きな成果であったと考えております。

5. 2025年度の活動実績等

これまでと同様に、湖岸清掃活動(53Pickup!2回、防塵挺身隊6回)と毎月2回の植生浄化施設の維持管理作業(草刈り、清掃、火入れ、生物観察等)を継続してきました。

(1) 2か所目の魚道づくり！

植生浄化施設では、さらに生き物を増やすために、旭酒造記念財団様の「水や水環境の保全活動等助成事業」として、2か所目の魚道の設置と湿地の掘削作業を行いました。



(図) 今回の作業箇所等



(図) 湿地・魚道整備の全体図

上図のとおり、Step1で湿地の掘削を行い、Step2で水路と湿地をつなぐ魚道、Step3では湖と湿地をつなぐ魚道をつくり、湖から湿地(水路型ビオトープ)と水路への生物移動環境を整え、乾燥化した湿地を改善し、生物多様性の向上を目的としました。

Step1：湿地の掘削(水路型ビオトープ) [4月7日～8日]

- ・ 小型バックホウを用いて掘削作業を行い、水路型ビオトープを作りました。



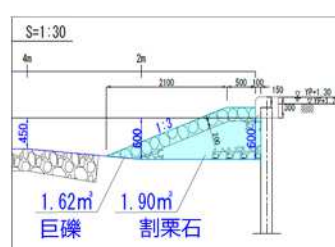
Step2：石組み魚道(水路側)の設置 [7月12日]

- ・ 割栗石を用いて、水路と湿地の段差を解消し、小魚等が移動しやすい魚道をつくりました。
- ・ 作業にあたっては、流れの観点から水生生物の生態系保全や河川の環境改善を研究している第一人者であり、全国各地で魚がのびやすい石組み魚道を整備している日本大学 安田陽一教授にお越し頂き、石組み魚道のつくり方をご指導頂きました。
- ・ 割栗石を用いて、魚の移動環境に必要となる石の隙間を確保しつつ動かないように石組みすると、明らかに流れがスムーズになり、流れる水の音も静かになりました。



Step3：石組み魚道(湖側)の設置 [12月27日]

- ・ 湖側は、鋼矢板護岸(直壁、水深約80cm)で、小魚等が移動しにくいいため、鋼矢板前面に石組みを行いました。こちらは霞ヶ浦の波力に耐えられるよう、直径30cm程度の石を用いました。
- ・ Step2と同様に、安田教授が解説しながら石を組み、大学生も参加して頂き、学びと体験を楽しみながらの作業となりました。



(2) その他の活動

① 第14回 魚道ワークショップ [9月9日～10日、日本大学]

- ・ NPO法人水辺基盤協会から、霞ヶ浦での活動について話題提供を行いました。
日本大学・環境水理実験室(船橋校舎)での実験水路の見学では、石組みがもたらす水の流れの変化や効果などを確認しました。
- ・ ワークショップは、魚道の技術的な内容のみならず、多自然川づくりに関する取り組みなど、各地で行われている活動の報告があり、充実した内容でした。



Topics - 環境水理ラボ

<https://www.facebook.com/p/%E5%AE%89%E7%94%B0%E9%99%BD%E4%B8%80-100050101110802/>

② 小さな自然再生サミット 2025京都大会

～みんなで考える「小さな自然再生」の次の一手～ [12月7日、京都大学宇治キャンパス]

- ・ 水辺で取り組む「小さな自然再生」の更なる深化と拡がりに向けて、全国で取り組む仲間が集い、今後の新たな活動や協働に展開していくことを目的に、開催されました。
全国から約200名が参加し、30地域の事例発表やパネルディスカッション、ポスター展示を通じた交流など、小さな自然再生の進め方や今後の方向性について議論を深めました。
- ・ NPO法人水辺基盤協会から、「生き物を増やす釣り人の活動in霞ヶ浦 ～魚道研修会後さらにパワーアップ～」と題して、清明川植生浄化施設での活動や課題、今後取り組みたいことなどを発表しました。



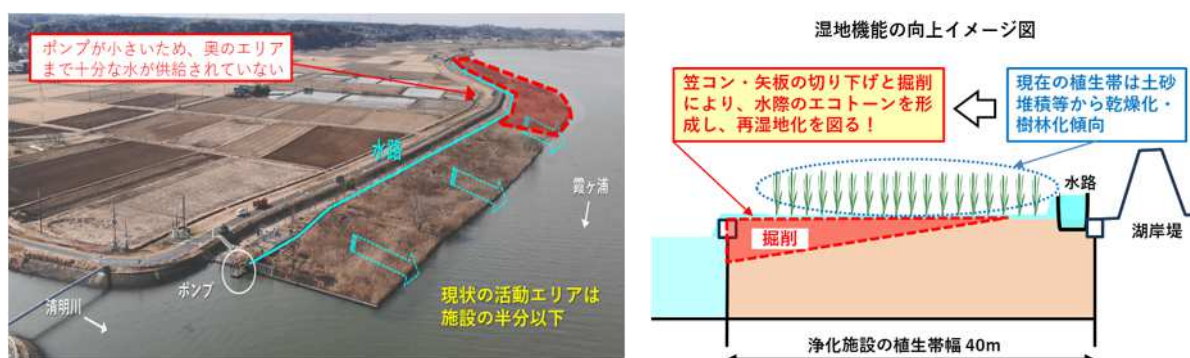
<https://www.rfc.or.jp/sozai/result/ivent/R7/collaboriversummit/collaboriversummit2025reportview.pdf>

6. 今後の更なる発展に向けて

各活動を継続、発展させていくために、今後やりたいことや検討項目等を以下にまとめた。

No.	今後やりたいこと	検討項目・留意点・キーワード等
1	維持管理活動や環境学習の参加者、及び会員を増やす	① 楽しさや魅力を感じてもらう ② 負担にならないこと ③ 学校との連携 （中高生や大学生へのアプローチ等） ④ 効果的なPR方法 ⑤ 環境学習の内容 ⑥ 人材育成
2	活動資金や運営関係	⑦ 各種助成金 ⑧ 企業との連携やご支援を頂く方法 ⑨ コーディネーター
3	生物や水環境に関する専門知識の向上、及び活動による効果の見せ方など	⑨ 専門家、アドバイザーの確保等 ⑩ 環境改善効果の評価手法
4	関係機関との連携強化	⑪ コミュニケーションの工夫 ⑫ 信頼関係の構築等
5	浄化施設の利用価値、環境の価値をさらに高める	⑬ 「自然共生サイト」への登録 ⑭ 更なる生物多様性の向上

上記、5. ⑭ 更なる生物多様性の向上 については、以下の整備イメージも有効かと考えています。



霞ヶ浦における湖岸植生帯の保全・再生は、これまで国や県でも様々な事業が行われてきましたが、減少傾向が止まらない状況です。

しかし、清明川植生浄化施設の植生帯は鋼矢板護岸で囲まれているため、自然には消失しません。約1kmに渡る施設は、多様な湿地環境の新たな創出や、質の維持・向上を図ることで、霞ヶ浦にとって、より貴重な場になり得る可能性があると考えています。今後の植生保全対策を考える上での試験施工箇所としての利用可能性もあるかもしれません。

また、近年増加しているサイクリング利用者の休憩場所として、リバースポットとしての活用など、さらに施設の利用価値を高められることも考えられます。

霞ヶ浦の水質や水生生物、住民の関心なども時代と共に変化してきましたが、私たちの活動ポリシーは、普段から魚釣りや飲料水として利用している「霞ヶ浦への恩返し！」です。この気持ちをいつも忘れずに、霞ヶ浦のために何ができるか？ スタッフ皆で考えながら今後も活動을続け、発展させて参りたいと思います。

これら清明川植生浄化施設での新たな取組みは、令和4年度に霞ヶ浦河川事務所が「全国多自然川づくり会議」(第4分科会)で代表事例として選定・表彰され、2024年には、「令和6年度 手づくり郷土賞」(国土交通大臣賞)を受賞しました。



<https://www.mlit.go.jp/river/kankyo/main/kankyou/tashizen/gaiyou R04.html>

<https://www.mlit.go.jp/report/press/sogo03 hh 000340.html>

加えて、2025年には、霞ヶ浦の豊かな自然環境を目指し、釣り人の想いから始まった30年にわたる湖岸清掃活動や、小さな自然再生などの活動が評価され、「第27回日本水大賞」(環境大臣賞)も受賞することができました。



<https://www.japanriver.or.jp/taisyo/jyusyoushiki/no27/index.htm>

これもひとえに、これまで活動にご参加頂いた多くの皆様のご理解・ご協力があったことです。この場を借りて、改めて御礼申し上げます。

